

研究ノート

医療的ケアに関する一考察
- 介護実習との関係について -

藤原 秀子

日本福祉大学 健康科学部

仲野 真由美

日本福祉大学 健康科学部

武田 啓子

日本福祉大学 健康科学部

A study on Medical Care Class
- The Relationship between Medical Care Class and Nursing Care Training -

Hideko Fujiwara

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Mayumi Nakano

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keiko Takeda

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 医療的ケア, 介護実習, 介護福祉士養成施設, 4年制課程

1. はじめに

これからの介護福祉士にはあらゆる介護ニーズに対応できる知識・技術が求められている。なぜなら我が国の高齢化の状況によると団塊の世代が65歳以上となる2015年には、3,000万人を超え、団塊世代が75歳以上になる2025年には、3,500万人に達すると見込まれている。現在、高齢化率が25.2%で4人に1人となり、2035年に33.7%で3人に1人、2055年には、40.5%の2.5人に1人が65歳以上の高齢者となると推測されて

いる¹⁾。そのため、今後、ますます重度の認知症高齢者が増加することも予測できる。また、厚生労働省が実施している身体障害児・者実態調査によると平成18年度の総数は3,483千人である。内部障がいから身体障がい等、様々な障がいを抱えている。このような人々を対象とし、多様化するニーズの中で、介護ニーズだけではなく医療的ニーズも求められるようになってきている。2005年7月には、厚生労働省医政局長から都道府県知事宛に「医師法第17条、医科医師法第17条及び保健師

助産師看護師法第31条の解釈について(通知)」が出された。無資格者を含めた「医師、看護師等の医療に関する免許を有しない者」が行うことのできる医行為が明示され、介護福祉士が行うことができる医行為が明らかになった。2007年11月には、社会福祉士及び介護福祉士の資質の確保・向上を図ることを目的として、社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律が成立し、同12月5日に公布された。この法律改正と併せて、より一層質の高い社会福祉士及び介護福祉士を養成していくことを目指して、社会福祉士養成課程及び介護福祉士養成課程における教育カリキュラム等の見直しがなされた。そして、社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律及び介護サービスの基盤強化のための介護保険法等の一部を改正する法律の施行に伴い、関係法令の規定に基づき、2012年10月に社会福祉士介護福祉士学校指定規則及び社会福祉に関する科目を定める省令の一部が改正となり介護福祉士でも医行為が実施できるように定められた。

このように介護における「医行為」に関する制度が急速に変化してきている中、2006年に川角ら²⁾は、介護福祉士養成施設の学生に対し実習における医行為についてアンケート調査を実施している。その中で、「医行為を行うことについての不安」という問いについて「不安」と「やや不安」と答えた学生を合わせると8割以上の学生が不安を持っていることを明らかにしている。また、「行ってよいと思わないもの」の問いでは、インスリン注射66.3%、褥瘡処置57.4%、吸引器による吸痰43.6%と高くなっていることも明らかにしている。このような状況がある中、2013年4月より介護福祉士養成施設4年制課程では「医療的ケア」教育が導入されることになった。本学では2014年度から3年生に対し「医療的ケア」の講義・演習が開講予定である。現在、開講準備を進めている段階であるが、開講するにあたり学生が「医療的ケア」についてどんな思いや考えを持っているのか把握できていない。そのため、本学の学生に対して「医療的ケア」の実態を把握することを試みる。また、どの学年に対して「医療的ケア」を開講すると効果的な教育に繋がるのかについても考えていきたい。学生が医行為を目にするのは実習時と考えられるため、「医療的ケア」についての思いや考えと介護実習の経験の関係に焦点をあてて検討する。実習を経験していない1年生、介護実習を終了している2年生、介護実習を終了している3・

4年生の3群を比較することで、学生にとって効果的な教育について考えていきたい。なお、本学の介護実習450時間は、介護実習(A・B:90時間)、介護実習(135時間)、介護実習(225時間)となっている。介護実習では通所介護や認知症対応型生活支援施設等での実習となっており、介護実習については特別養護老人ホームや老人保健施設等での実習を実施している。

2. 目的

学生にとって効果的な「医療的ケア」教育を考えていく基礎資料として、本学の学生が「医療的ケア」についての不安、「医療的ケア」を受ける利用者のイメージや知識を持っているのかを把握する。その際、介護実習を実施していない1年生を1群、介護実習を終了している2年生を2群、すべての介護実習を終了している3・4年生を3群とし、3群の差を明らかにし「医療的ケア」教育に反映することを目的とする。

3. 方法

3.1 調査対象

本学の介護学専攻の学生158名で、1年生は48名、2年生は37名、3年生は39名、4年生は34名である。1群は1年生48名、2群は2年生37名、3群は3・4年生73名である。

3.2 調査期間

2013年6月～7月

3.3 調査方法

集合質問紙調査を無記名で実施した。

3.4 調査項目

基本属性(学年・性別)、「医療的ケア」に対する不安、利用者のイメージ、「医療的ケア」を見た経験について、「医療的ケア」の言葉の理解、基本研修(講義・演習)、「医療的ケア」の受講について設問をし、からについては自由記述欄を設けた。

3.5 分析方法

各項目について集計後、介護実習を実施していない

1年生を1群，介護実習のみを終了している2年生を2群，介護実習まですべて終了している3・4年生を3群として²検定を行った。有意水準は5%とした。なお，自由記述については内容を分析した上でカテゴリー化を行った。

3.6 倫理的配慮

学生に対し調査の目的，成績への評価に影響しないこと，個人が特定されないことを文書で説明し同意を得た。

4. 結果

4.1 対象者の基本属性

回収率は93%で，1群（1年生）44名（92%），2群（2年生）35名（95%），3群（3・4年生）68名（93%）の147名の回答を分析対象とした。性別は，1群では男性が23名（52%），女性は21名（48%），2群では男性が13名（37%），女性は22名（63%），3群では男性が19名（28%），女性は49名（72%）となり，合計では，男性55名（37%），女性92名（63%）であった。

4.2 「医療的ケア」に対する不安について

介護福祉士として「医療的ケア」を実施するにあたり，学生の考えを自由に記述してもらった。その中から「不安」，「怖い」と記載があったものをカテゴリー化した（表1）。すべての群で記載があった内容は，自分が「医療的ケア」を上手くできるのかという技術面での不安，実施することで利用者の命に関わるという不安の記載が見られた。1群のみに記載があった内

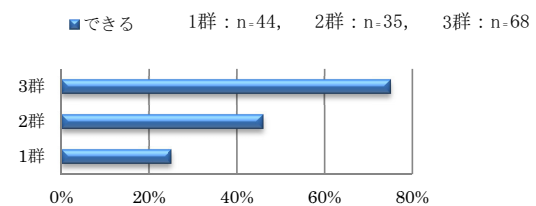
表1 講義についての不安

1群	2群	3群
技術面での不安 命に関わる不安		
理解不足	負担の拡大 医療に関する事 今後への不安	
	知識不足 怖いイメージ 事故につながる不安 他職種からのクレーム 自信がない	

容は，「医療的ケア」に関する理解不足からの不安の記載が見られた。2群と3群に記載があった内容は「医療的ケア」を実施することで介護職への負担が拡大する事への不安，医療に関する事，今後に関する不安の記載が見られた。また，3群のみに記載があった内容として，「医療的ケア」に関する知識不足や「医療」=怖いというイメージから不安，事故につながるのではないかというリスク面での不安，他職種からのクレームが入ることへの不安，自分に自信がないことからの不安などの記載が見られた。

4.3 利用者のイメージについて

「医療的ケア」を受ける利用者のイメージができませんかの問いでは「できる」と回答した者は，3群は51名（75%），2群は16名（46%），1群は11名（25%）となり3群でその割合がもっとも高かった（ $\chi^2_{(2)} = 27.8, p < 0.05$ ）（図1）。さらに，「できる」と回答した学生に対し具体的にどんなイメージを持っているのか自由記述の内容を分析し，カテゴリー化を行った。カテゴリーとして，「身体的機能が衰えている人」，「胃ろう/カテーテル等の物品が必要な方」，「治療が必要な人」，「疾患を抱えている人」，「看護師・医師が必要な人」，「心情・気持ち」，「介護が必要な方」，「その他」の8項目に分けることができた（表2）。すべての群で共通して記載がみられた項目がからであった。また，内容を見ていくと群（学年）が高くなるにつれて専門用語の活用が多くみられた。たとえば「胃ろう/カテーテル等の物品が必要な人」の項目では，1群での記載では「口や鼻にチューブが入っている人」となっていたのが，2群以上になると「胃ろう」，「たんの吸引」等の専門用語が記載されるようになり，3群になるとその専門用語の数が増え「留置カテーテル」，「経管栄養」等の言葉が記載されていた。



*** P < 0.001

図1 利用者のイメージができますか

表2 具体的にどんなイメージを持っていますかのカテゴリー

項目	1群	2群	3群
身体的機能が衰えている人	<ul style="list-style-type: none"> ・寝たきり ・筋力が衰えている ・ベッドに横たわりあまり動かない 	<ul style="list-style-type: none"> ・機能が低下している人 ・自分で食事ができない 	<ul style="list-style-type: none"> ・寝たきりの人 ・自力でたんを排出できない方 ・自らの力で体の異物を排除することができない ・息があら ・自分のことを1人ではできない人 ・嘔下がしづらい人 ・自分で痰を出すことができない人 ・意思疎通ができる人はいない
胃ろう・カテーテル等の物品が必要な人	<ul style="list-style-type: none"> ・酸素吸入 ・人工呼吸器を使う ・ホースの様なものを入られている ・口や鼻にチューブが入っている ・身体に電極がついている ・生命維持のため装具を付けている 	<ul style="list-style-type: none"> ・胃ろう ・カテーテル ・たん吸引 ・ストーマ ・酸素吸入 	<ul style="list-style-type: none"> ・胃ろう ・留置カテーテル ・たん吸引 ・経管栄養 ・胃ろうや導尿等の医療機器が常時必要 ・管でつながれている
治療が必要な人	<ul style="list-style-type: none"> ・注射を打つ ・治療を受けているイメージ 	<ul style="list-style-type: none"> ・治療が必要な人 ・医療行為が必要となる方 ・処置 ・治療 ・インスリン注射 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケガをしてしまった利用者 ・病気や傷を治すための治療を行っている ・注射をする ・傷口の手当て ・薬や注射をする人
疾患を抱えている人	<ul style="list-style-type: none"> ・病気（持病）を抱えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・腎不全疾患 ・ガン ・肺炎 ・病気 ・糖尿病患者 ・疾患がある人 	<ul style="list-style-type: none"> ・末期の人 ・糖尿病の方 ・腎臓に疾患がある方 ・呼吸器系に疾患がある方 ・重度障害を持っている方 ・疾患がある方 ・重い病気の方 ・巻き爪や水虫を持っている人 ・疾病のある人
看護師・医師が必要な人	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師・医師が関わっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし
心情・気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・苦しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦しそう ・辛そう
介護が必要な人	<ul style="list-style-type: none"> ・介護が必要な人 	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・要介護度が高い人 ・介護の高い利用者
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションがとりにくい人 ・吸入や経管のケア等日常的に行われていて、続けなければ利用者の生死に関わる

4.4 医療的ケアを見た経験について

「医療的ケア」を見たことがありますかという問いについて「ある」と答えた者は、3群で60名(88%)、2群で18名(51%)、1群で12名(27%)となり、3群で「医療的ケア」を見たことがあるという回答がもっとも多かった ($\chi^2_{(2)} = 43.7, p < 0.05$) (図2)。

さらに、「口の中にあるたんの吸引をしているところ」($\chi^2_{(2)} = 51.7, p < 0.05$)、「鼻からたんの吸引をし

ているところ」($\chi^2_{(2)} = 10.6, p < 0.05$)、「喉のところからたんの吸引をしているところ」($\chi^2_{(2)} = 13.2, p < 0.05$)、「胃に直接穴をあけて栄養を入れているところ」($\chi^2_{(2)} = 28.4, p < 0.05$)、「腸に直接穴をあけて栄養を入れているところ」($\chi^2_{(2)} = 15.1, p < 0.05$)の5項目で有意差がみられた(表3)。また、「鼻から胃に直接管を入れ栄養を入れているところ」、「AEDを使用しているところ」という項目では見たことがあるという

表3 見たことがある「医療的ケア」について

項目	1群 (n=44)		2群 (n=35)		3群 (n=68)		χ^2	p
	n	%	n	%	n	%		
口の中にあるたんの吸引をしているところ	6	14	8	23	52	76	51.7	***
鼻からのたんの吸引をしているところ	3	7	4	11	20	29	10.6	**
喉のところからたんの吸引をしているところ	3	7	6	17	24	35	13.2	**
胃に直接穴をあけ栄養を入れているところ	3	7	11	31	38	56	28.4	***
腸に直接穴をあけ栄養を入れているところ	0	0	1	3	14	21	15.1	**

** = p < 0.01, *** = p < 0.001

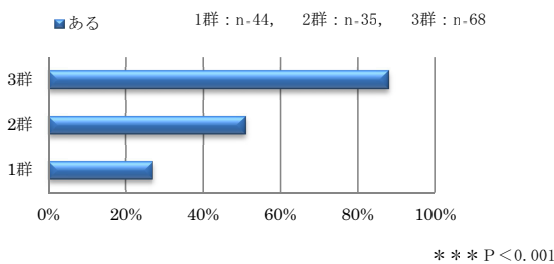


図2 「医療的ケア」を見たことがありますか

回答には差がみられなかった。有意差が見られた5項目すべてで3群は1群・2群より「医療的ケア」を見たことがある割合が高かった。3群で上位にあがった項目は「口の中にあるたんの吸引をしているところ」が52名(76%)、「胃に直接穴をあけ栄養を入れているところ」が38名(56%)と、1群・2群に比べ高い割合で「医療的ケア」を見たことがあると回答している。1群で見たことがあるという回答が多かった項目は「口の中にあるたんの吸引をしているところ」で6名(14%)、2群では「胃に直接穴をあけ栄養を入れるところ」11名(31%)であった。さらに、見たことがある「医療的ケア」については、どこで見たことがあるのかを自由記載してもらった。有意差があったすべての群で「特別養護老人ホーム」という回答が一番多かった。

4.5 言葉の理解について

「医療的ケア」の言葉を聞いたことがありますかという問いに「ある」と答えた者は、3群が64名(94%)、2群が29名(83%)、1群が33名(75%)で、3群がもっとも多かった($\chi^2_{(2)} = 8.3, p < 0.05$) (図3)。「ある」と回答した学生に対して、どこで聞いたことがあるのかを質問した。差があった項目は「実習先」であった。3群は23名(34%)、2群は1名(3%)、1

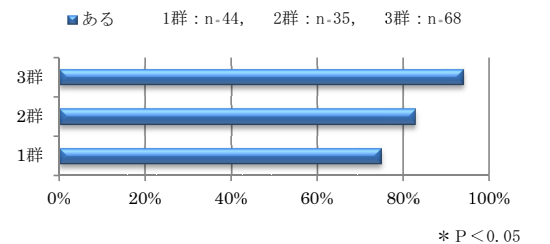


図3 「医療的ケア」の言葉を聞いたことがありますか

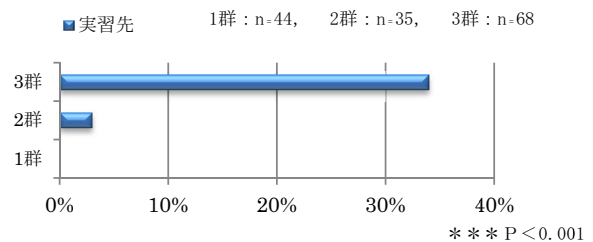


図4 「医療的ケア」の言葉をどこで聞きましたか

群に関しては0名(0%)となり、3群がもっとも高かった($\chi^2_{(2)} = 28.5, p < 0.05$) (図4)。さらに、「医療的ケア」教育の中で使われる言葉の「喀痰吸引」、「気管カニューレ」、「胃ろう」、「腸ろう」、「経管栄養」、「救急蘇生法」の6つの言葉について知っている言葉に「」を付けてもらった。その結果、5つの言葉について認知度の差がみられた(表4)。有意差がみられたのは「気管カニューレ」($\chi^2_{(2)} = 23.7, p < 0.05$)、「胃ろう」($\chi^2_{(2)} = 68.8, p < 0.05$)、「腸ろう」($\chi^2_{(2)} = 26.5, p < 0.05$)、「経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 87.2, p < 0.05$)の4つの言葉で、いずれも3群がもっとも認知度が高かった。なお「喀痰吸引」($\chi^2_{(2)} = 17.4, p < 0.05$)については、1群・3群よりも2群の方が言葉を知っている割合が高く、すべての群で73%以上の学生が知っているという回答をしていた。また、「救急蘇生法」については、認知度の差がみられなかった。

表4 「医療的ケア」に関する言葉を知っていますか

項目	1群 (n=44)		2群 (n=35)		3群 (n=68)		χ^2	p
	n	%	n	%	n	%		
喀痰吸引	32	73	34	97	65	96	17.4	***
気管カニューレ	1	2	9	26	30	44	23.7	***
胃ろう	17	39	34	97	67	99	68.8	***
腸ろう	7	16	21	60	43	63	26.5	***
経管栄養	10	23	32	91	67	99	87.2	***

*** = p < 0.001

表5 講義で難しそうだと思う項目について

基本研修 (講義)	1群 (n=44)		2群 (n=35)		3群 (n=68)		χ^2	p
	n	%	n	%	n	%		
人間と社会	19	43	24	69	29	43	7.1	*
清潔保持と感染予防	14	32	12	34	9	13	7.9	*
高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引概論	37	84	31	89	47	69	6.4	*
高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引実施手順解説	35	80	28	80	41	60	6.7	*
高齢者及び障がい児・者の経管栄養概論	37	84	32	91	49	72	6.1	*
高齢者及び障がい児・者の経管栄養実施手順解説	34	77	30	86	41	60	8.4	*

* = p < 0.05

4.6 難しそうだと思う項目について

4.6.1 講義について

基本研修 (講義) で記載されている9項目のうち、下記の6項目について差がみられた。「人間と社会」($\chi^2_{(2)} = 7.1, p < 0.05$)、「清潔保持と感染予防」($\chi^2_{(2)} = 7.9, p < 0.05$)、「高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引概論」($\chi^2_{(2)} = 6.4, p < 0.05$)、「高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引実施手順解説」($\chi^2_{(2)} = 6.7, p < 0.05$)、「高齢者及び障がい児・者の経管栄養概論」($\chi^2_{(2)} = 6.1, p < 0.05$)、「高齢者及び障がい児・者の経管栄養実施手順解説」($\chi^2_{(2)} = 8.4, p < 0.05$)について、難しいと感じていた (表5)。

1群・3群より2群はすべての項目で難しそうであると回答している人の割合が多かった。そして「喀痰吸引」、「経管栄養」の言葉が記載されている項目については80%以上という高い割合で難しそうだと回答をしている。

また、「保健医療制度とチーム医療」、「安全な療養生活」、「健康状態」の3項目については、有意差がみられなかった。

4.6.2 演習について

基本研修 (演習) で記載されている7項目のうち、下記の5項目について差がみられた。「口腔内の喀痰吸引」($\chi^2_{(2)} = 12.7, p < 0.05$)、「胃ろうによる経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 7.2, p < 0.05$)、「腸ろうによる経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 12.0, p < 0.05$)、「経鼻経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 6.4, p < 0.05$)、「救急蘇生法」($\chi^2_{(2)} = 7.7, p < 0.05$)では、難しいそうだと思う割合について差が見られた (表6)。1群は「口腔内の喀痰吸引」、「胃ろうによる経管栄養」、「腸ろうによる経管栄養」、「経鼻経管栄養」の4項目で、86%以上という高い割合で難しそうだと回答をしている。「救急蘇生法」の項目については、1群より2群が難しそうだと思っていることがわかった。また、3群はすべての5項目で1群・2群より難しそうだと思っている人の割合が低かった。

4.7 関心がある項目について

4.7.1 講義について

基本研修 (講義) で記載されている9項目のうち、下記の3項目について差がみられた。「高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引実施手順解説」($\chi^2_{(2)} = 17.2, p$

表6 演習で難しそうだと思う項目について

基本研修 (演習)	1群 (n=44)		2群 (n=35)		3群 (n=68)		χ^2	p
	n	%	n	%	n	%		
口腔内の喀痰吸引	38	86	28	80	39	57	12.7	**
胃ろうによる経管栄養	39	89	25	71	45	66	7.2	*
腸ろうによる経管栄養	41	93	27	77	44	65	12.0	**
経鼻経管栄養	39	89	26	74	46	68	6.4	*
救急蘇生法	20	45	25	71	30	44	7.7	*

* = p < 0.05, ** = p < 0.01

表7 講義で関心がある項目について

基本研修 (講義)	1群 (n=44)		2群 (n=35)		3群 (n=68)		χ^2	p
	n	%	n	%	n	%		
高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引実施手順解説	13	30	9	26	42	62	17.2	***
高齢者及び障がい児・者の経管栄養概論	7	16	8	23	27	40	8.1	*
高齢者及び障がい児・者の経管栄養実施手順解説	12	27	8	23	41	60	18.6	***

* = p < 0.05, *** = p < 0.001

< 0.05), 「高齢者及び障がい児・者の経管栄養概論」($\chi^2_{(2)} = 8.1, p < 0.05$), 「高齢者及び障がい児・者の経管栄養手順解説」($\chi^2_{(2)} = 18.6, p < 0.05$)で関心があると答えた割合について差が見られた(表7)。3群に関しては「高齢者及び障がい児・者の喀痰吸引実施手順解説」42名(62%), 「高齢者及び障がい児・者の経管栄養概論」27名(40%), 「高齢者及び障がい児・者の経管栄養手順解説」41名(60%)と、1群・2群よりも関心があると回答した学生が多かった。

4.7.2 演習について

基本研修(演習)で記載されている7項目のうち、下記の7項目のすべてに差がみられた。「口腔内の喀痰吸引」($\chi^2_{(2)} = 16.0, p < 0.05$), 「鼻腔内の喀痰吸引」($\chi^2_{(2)} = 13.6, p < 0.05$), 「気管カニューレ内部の喀痰吸引」($\chi^2_{(2)} = 16.3, p < 0.05$), 「胃ろうによる経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 16.0, p < 0.05$), 「腸ろうによる経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 18.1, p < 0.05$), 「経鼻経管栄養」($\chi^2_{(2)} = 18.9, p < 0.05$), 「救急蘇生法」($\chi^2_{(2)} = 6.9, p < 0.05$)に関して関心がある人の割合について差が見られた(表8)。3群については、すべての項目で46%以上関心がある

表8 演習で関心がある項目について

基本研修 (演習)	1群 (n=44)		2群 (n=35)		3群 (n=68)		χ^2	p
	n	%	n	%	n	%		
口腔内の喀痰吸引	13	30	16	46	46	68	16.0	***
鼻腔内の喀痰吸引	9	20	10	29	36	53	13.6	**
気管カニューレ内部の喀痰吸引	7	16	5	14	31	46	16.3	***
胃ろうによる経管栄養	9	20	15	43	40	59	16.0	***
腸ろうによる経管栄養	6	14	8	23	34	50	18.1	***
経鼻経管栄養	7	16	6	17	34	50	18.9	***
救急蘇生法	31	70	15	43	44	65	6.9	*

* = p < 0.05, ** = p < 0.01, *** = p < 0.001

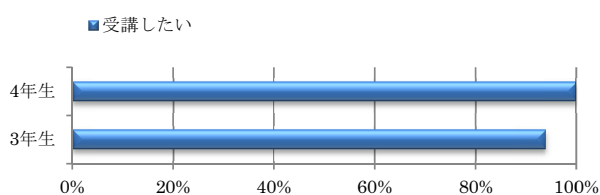


図5 「医療的ケア」を受講したいですか

と回答しており、1群・2群よりも関心があると回答している。

4.8 「医療的ケア」の受講について

3群のみに「医療的ケア」を受講したいか尋ねた。3年生で34名(94%)、4年生で32名(100%)の学生が「受講したい」と回答した(図5)。自由記述をカテゴリー化したところ、「介護福祉士として必要」、「仕事をする上で必要」、「興味・関心」、「知識を身に付ける」、「困らないため」、「生命に関わるため」の6項目であった。自由記述より「就職を控え必要な知識だと考えた」、「福祉を目指すものとして、必要だと思うから」等という内容がみられた。

5. 考察

5.1 学生の思い・知識の把握

「医療的ケア」を行う事に対して、自分が「医療的ケア」を上手くできるのかという技術面での不安、利用者の命に関わるという不安がすべての群に不安があることが分かった。学生は、自分たちが「医療」に携わることにに関して、うまく対応が出来なかった時には利用者の命にかかわることになることを理解している。1群のみで記載があった不安としては「医療的ケア」に関する理解不足に対する不安があがっており、これは、「医療的ケア」を受ける利用者のイメージがついておらず、「医療的ケア」でどんなことをするのか理解していないことからの不安であると思われる。2群と3群で記載があった「医療的ケア」を実施することで介護職の業務が増大になることで負担が拡大する事への不安、医療に関する事、今後に関する不安については、介護実習を経験していることで、介護業務を理解しており、自分が介護職として就職した際「医療的ケア」に対して自分ができるのかという不安があると思われる。また、3群のみに記載があった「医療的ケア」に関する知識不足からの不安や「医行為」は命に

関わるような危険な事が多く怖いというイメージからの不安、事故につながるのではないかとというリスク面での不安、他職種からのクレームが入ることへの不安、自分に自信がないことからの不安については、3群は介護実習を終了していることで利用者のイメージがつき「医療的ケア」について介護現場でどんなことを行っているのかを理解していると思われる。そのうえで自信がない自分たちが「医療的ケア」に携わることで、効率よく行動できず、利用者に危険な目に合わせてしまうのではないかという思いからこのような不安があがっていると思われる。

そして、「医療的ケア」を受ける利用者のイメージや「医療的ケア」を見たことがあるか、言葉を聞いた事があるか等について、1群より2群、2群より3群と学年があがるにつれて、利用者のイメージがつくようになり、「医療的ケア」を見る機会や聞くことが多くなった。また、「医療的ケア」をどこで見たことがあるかに関して「特別養護老人ホーム」という回答がすべての群で高くなっており、「医療的ケア」の言葉を実習先で聞いたと回答している学生が多かった。このことから、介護実習を終了している3群の学生は「医療的ケア」について、介護実習で見たり聞いたりする事が多く、「医療的ケア」が必要となる利用者の状況を把握し、実際に「医療的ケア」を実施している現場を見たことが多いことから1群・2群よりも「医療的ケア」の理解や認知度について高まったと考える。

さらに、「医療的ケア」の講義科目では有意差があった6項目すべてについて、2群が一番難しそうであると回答している。1群より高くなったことについては今後考えていく必要があると思われるが、介護実習を終了したことにより介護現場で介護職が「医療的ケア」を実施することの重要性を学び、大変なことだと感じていると思われる。そして知識や経験が少ない自分たちが「医療的ケア」に携わっていくことに対して不安を抱きこのような結果につながったと思われる。演習科目では、有意差があった5項目中4項目について1群が一番難しそうだと回答している。言葉だけでは、どんなことを行うのかイメージができず難しそうであると回答していると思われる。3群については、有意差があった講義科目の6項目、演習科目の5項目ともに難しそうだと感じているすべての項目で1群・2群より低い割合で難しそうであると回答している。

また、講義・演習で関心がある項目については有意差があった講義科目の3項目、演習科目の7項目中6項目について3群がもっとも高い割合で関心があると回答している。このことから、介護実習を終了している3群は講義・演習に対して難しそうであると感じているが、1群・2群より学ぶ意欲が高いと考えられる。

また、3群のみに尋ねた「医療的ケア」を受講したいかの問いでは、「受講したい」と回答している者は多く、4年生に限って言えば100%という結果だった。自由記述より「就職を控え必要な知識だと考えた」、「福祉を目指すものとして、必要だと思うから」等という内容が多くみられた。自分たちが卒業してから必ず求められる知識・技術だという事を理解しているからだと思われる。そのため、今、学校で学べることは学びたいという学生の意欲が窺えたと考えられる。

5.2 「医療的ケア」教育

介護福祉士養成施設で「医療的ケア」を開講するにあたり、下記の2点が重要と考える。第1に介護実習が終了していない1群に対し「医療的ケア」の講義・演習を実施しても利用者のイメージができないため、どんな場面で、どのような判断がなされ、介護福祉士としてできる対応が明確にイメージできない。そのため「医療的ケア」の知識を習得しようとしても効果が得られない。介護実習終了後に「医療的ケア」を開講することにより、利用者のイメージがつかないという事がなくなり講義・演習を理解しやすくなると思われる。

第2に、3群の学生が多く抱えている不安に対して、介護福祉士養成施設で行われる「医療的ケア」の講義・演習をただ単に知識・手順等の手技のみを伝えるだけでは学生が抱えている不安は軽減されないとと思われる。「医療的ケア」を実際に行ううえで、倫理観や尊厳に関する事、リスク回避・予防などについても伝えていく必要があり、介護福祉士として利用者の一人ひとりの命に関わりその人らしい生活を守る事の重要性についても考えていけるような教育を行っていくことが重要だと思われる。

6. 結論

本研究の結果から、以下の6点について示唆された。

「医療的ケア」に対しての不安の内容について、1

群、2群、3群とともに利用者の命に関わることへの不安を抱いていた。

「医療的ケア」に対しての不安の内容について、2群、3群とも介護実習を経験したことで自分たちに「医療的ケア」ができるかどうかの不安を抱いていた。

1群は介護現場での経験を実施していないため「医療的ケア」を受ける利用者のイメージがつかず、医療的な知識についても乏しい。

2群は「医療的ケア」の講義科目に関して、1群・3群よりも難しそうだと思っていることが高かった。

3群は「医療的ケア」を受ける利用者のイメージが明確となっており、医療的な知識についても1群・2群よりも専門用語を活用し言葉の理解についても高かった。

3群は「医療的ケア」の受講を希望しており「医療的ケア」の関心が高かった。

以上より、介護実習を終了している3年生に対して「医療的ケア」を実施するは、利用者のイメージがついており、「医療的ケア」の内容についてもイメージがついていることで、1年生や2年生で「医療的ケア」を開講するより効果的に学ぶことができるのではないかと考える。

7. おわりに

今後の課題として、介護実習を体験していない1群は、介護現場での体験や経験がないため「医療的ケア」を受ける利用者のイメージがつかず、介護現場でどんなことが実施されているのか理解できず不安が拡大していると思われる。また、2群は介護実習は終了しているが、通所介護や認知症対応型施設での実習となっているため「医療的ケア」を受けるような重度の利用者のイメージがつかず、実際の「医療的ケア」を行っている場面を見たことがない学生が多い。つまり「医療的ケア」という言葉だけで、医学的知識が必要で見たことがない未知な出来事に対する不安が強く、先入観だけで難しそうだと感じていると考えられる。そのため、1群・2群の段階で「医療的ケア」に関する言葉や演習で使用する物品等については生活支援技術等の講義・演習で触れながら進め、学生の聴覚・視覚に訴えることで心に残り「医療的ケア」の関心が高まり学生にとって効果的な教育ができるのではないかと考える。

さらに、「医療的ケア」を学び介護福祉士養成施設を卒業し介護現場ですぐに対応できるとは考えられない。しかし、多くの学生は苦しんでいる利用者を目の前にして、自分が何とかしなければという使命感を持って対応していくと思われる。その際、利用者にとって安全で安楽な方法や学生が根拠を持って対応できる知識・技術を身に付けさせることが介護福祉士養成施設としての責務であると考え。そのため、今後も学生が考えている「医療的ケア」について把握していくとともに「医療的ケア」の講義・演習を受講して、どんなことを感じ、考えたのか等を理解していき学生にとって効果的な教育について検討していきたい。

謝辞

本研究にご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。また、本研究ノートを作成するにあたり、ご指導頂きました健康科学部リハビリテーション学科長久世淳子先生に深謝致します。

なお、本研究は、日本福祉大学健康科学研究所（公募型研究プロジェクト）の助成を受けて実施しました。研究の機会を下さいましたことを深謝いたします。

引用文献

- 1) 内閣府：平成 23 年度版 高齢社会白書（全体版）（2011）
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23index.html>
- 2) 川角真弓他：介護福祉実習における医療行為に関する一考察。第 13 回介護福祉士教育学会・報告。介護福祉教育 NO. 24. 中央法規出版。pp. 71-75 (2007)

参考文献

- 1) 厚生労働省：平成 18 年度身体障害児・者実態調査，（2006）
- 2) 厚生労働省医政局長：医師法第 17 条歯科医師法 17 条及び保健師助産師看護師法 31 条，（2005）
- 3) 厚生労働省社会・援護局長：介護サービスの基盤強化のための介護保険法等の一部改正する法律の公布について（社会福祉士及び介護福祉士関係）（2011）
- 4) 文部科学省初等教育局児童生徒課長，文部科学省高等教育局医学教育学教育課長，厚生労働省社会・援

護局福祉基盤課長：介護福祉士養成課程における「医療的ケア」の教育内容について，（2011）

- 5) 荘村明彦：医療的ケア介護福祉士養成講座別巻，中央法規出版，（2013）
- 6) 川田明広：第三号研修（特定の者対応）のための喀痰吸引等研修テキスト 喀痰吸引・経管栄養注入方法の知識と技術，中央法規出版（2013）
- 7) 竹宮敏子監修：医療的ケア経管栄養研修 介護職員等による喀痰吸引・経管栄養，ミネルヴァ書房（2013）
- 8) 荘村明彦：介護職員などによる喀痰吸引・経管栄養研修テキスト指導者用 指導上の留意点と Q&A，中央法規出版（2012）